

「第9席・ごま塩入団の日」

——まだ、ごま塩がヨルファミリアの一員ではなかった頃。その名は、一部では知られていた。圧倒的な怪物でもない。伝説的な剣士でもない。ましてや、世界を揺るがすような能力者でもない。ただ——

妙にしぶとい少年がいる。

それが、ごま塩だった。

第一章「最悪の出会い」

夕暮れ。荒廃した旧市街を、ヨルファミリアの一行が歩いていた。先頭はヨル。そのすぐ後ろに、まふい。レモンたちも続いている。目的は、この区域に出現した敵対勢力の調査。

「静かすぎるね」



レモンが周囲を見渡す。ヨルも足を止める。

「うん。ちょっと嫌な感じ」

まふいの手が武器へ伸びる。

「ヨル。私が先行します」

「まだいいよ。全員で——」

その瞬間、ガシャアアアン！！少し離れた建物の中から、とんでもない音が響いた。全員が構える。

「敵？」

「可能性はあります」

まふいがヨルの前へ出る。再び。ドガッ！！

「痛いゴマアアアア！！」

「……………」

ヨルが瞬きをする。レモンも固まる。

「……ゴマ？」



建物の扉が勢いよく開いた。中から一人の少年が飛び出してくる。大量の荷物を抱えながら。

「退避ゴマァァ！！」

その後ろから敵兵が十数人。

「待て！！」

「逃がすな！！」

「待てと言われて待つ奴はいないゴマァ！！」

少年——ごま塩は全力疾走。そして、ヨルたちの前で盛大につまずいた。ズザァァァ！！

「……………」

「……………」

「……………」

ごま塩が顔を上げる。ヨルと目が合う。

「……………」



「大丈夫？」

「……………」

ごま塩は立ち上がった。服についた埃を払う。

「もちろんゴマ」

「いや今すごい転び方してたけど」

「見なかったことにしてほしいゴマ」

その背後。敵兵たちが追いつく。

「いたぞ！」

「そいつを捕まえろ！」

ヨルの表情が変わる。

「……追われてるの？」

ごま塩は答える。

「まあ、色々あったゴマ」



「何したの？」

「……………」

「……………」

「敵の物資を全部持って逃げたゴマ」

ヨルたちが荷物を見る。

「これ全部！？」

「全部ゴマ」

レモンが吹き出す。

「何やってんの！？」

「困ってそうな村があったから持っていこうと思ったゴマ！」

ヨルの目が少し変わった。



第二章「弱いから何だゴマ」

敵兵が武器を構える。

「そいつを渡せ！」

ヨルが一步前へ出る。

「嫌だけど」

「何？」

「この子、別に悪いことしてないでしょ」

ごま塩が横から言う。

「いや物資は盗んだゴマ」

「今いいところだから黙ってて」

「はいゴマ」

敵兵がヨルたちへ襲いかかる。だが——戦闘は一瞬だった。

ヨルファミリア。当時から、その戦力は圧倒的。レモンが敵



陣を崩し。他のメンバーが突破口を広げる。そしてヨルの前まで辿り着ける者は、ほとんどいない。

ごま塩は呆然としていた。

「……………」

強い。あまりにも強い。自分とは、住んでいる世界が違う。そのとき、一人の敵が死角からヨルへ迫った。

「ヨル！」

まふいが反応する。だが、それより先に――

「危ないゴマ！！」

ごま塩が飛び込んだ。ドンッ！！ヨルを押し退ける。代わりに攻撃を受け、ごま塩の身体が地面を転がった。

「ごま塩！」

ヨルの声。敵は直後、まふいによって叩き伏せられる。

「……ヨルに手を出しましたね」



まふいの声が低い。明らかに空気が変わる。

「まふい、もう大丈夫」

ヨルが止める。そして、ごま塩へ駆け寄った。

「大丈夫!？」

「……………」

ごま塩がゆっくり起き上がる。

「痛いゴマ……」

「なんで庇ったの？」

「……………」

ごま塩はヨルを見る。

「助けてもらったからゴマ」

「それだけ？」

「それだけで十分ゴマ」



ヨルが黙る。ごま塩は立ち上がった。足が震えている。明らかにヨルたちほど強くない。それでも、残っていた敵へ向き直った。

「まだやるの？」

レモンが聞く。

「やるゴマ」

「無理しない方がいいよ」

「分かってるゴマ」

ごま塩は拳を握る。

「僕は弱いゴマ」

誰も否定しなかった。本人が一番よく分かっている。

「でも——」

ごま塩は敵を見る。

「弱いから逃げていい理由にはならないゴマ。」



ヨルが静かにその背中を見つめる。その言葉だけは妙に強かった。

第三章「なんでそこまで？」

戦闘終了。敵対勢力は撤退した。ごま塩は再び荷物を背負う。

「じゃあ僕は行くゴマ」

ヨルが呼び止める。

「どこ行くの？」

「近くの村ゴマ」

「さっき言ってた？」

「そうゴマ」

「その荷物全部、一人で？」

「そうゴマ」



見るからに重い。レモンが呆れる。

「何キロあるの、それ」

「知らないゴマ」

「手伝ってくれる仲間は？」

「いないゴマ」

「……………」

「一人ゴマ」

少しだけ空気が変わる。ごま塩は笑う。

「慣れてるから大丈夫ゴマ」

ヨルが尋ねた。

「なんでそこまでするの？」

「ん？」

「危ない目に遭ってまで物資盗んで、一人で運んで」



ごま塩は少し考える。

「……昔」

「うん」

「僕も誰かに助けてもらったことがあるゴマ」

いつもの調子とは違う。静かな声。

「その人、別に強くなかったゴマ」

「……………」

「でも僕を助けてくれたゴマ」

ごま塩は荷物を背負い直す。

「だから僕もそうするだけゴマ」

ヨルは何も言わなかった。強さだけなら。ヨルファミリアには、ごま塩より優れた人間がいくらでもいる。けれど、目の前の少年には——数字では測れない何かがあった。



第四章「ヨルからの勧誘」

「ねえ、ごま塩」

「何ゴマ？」

「ヨルファミリアに来ない？」

「……………」

ごま塩が止まった。

「……………」

レモンもヨルを見る。

「ヨル？」

まふいは黙っている。ごま塩は自分を指差す。

「僕ゴマ？」

「うん」

「なんでゴマ？」



「気に入ったから」

「軽いゴマ!？」

「ちゃんと考えてるよ」

ヨルが笑う。

「強さはこれから身につければいい」

そして――

「でも、誰かのために危険な場所へ飛び込めるかどうかは、
教えられて身につくものじゃないから」

ごま塩は言葉を失う。

「うちに来れば一人じゃないよ」

「……………」

「荷物だって皆で――」

ヨルが言いかける。レモン。

「……ヨル」



「ん？」

「なんか、ごま塩って荷物持ち向いてそうじゃない？」

「……………」

ごま塩。

「嫌な予感がするゴマ」

ヨルが荷物を見る。ごま塩を見る。荷物を見る。

「確かに」

「待つゴマ」

「採用」

「何の採用ゴマ！？」

第五章「入団試験」

とはいえ。正式加入には最低限の実力確認が必要だった。ごま塩の相手を担当したのは——レモン。

「手加減するから安心して」

「その言葉が一番怖いゴマ」

開始。三秒。ドンッ！！

「ゴマァ！！」

ごま塩が吹っ飛ぶ。立ち上がる。再び挑む。吹っ飛ぶ。立ち上がる。また挑む。吹っ飛ぶ。

「……………」

レモンの表情が徐々に変わっていく。

「まだやる？」

「当然ゴマ……」

「もう合格でいいと思うけど」



「僕が納得してないゴマ」

「……………」

再び構える。何度倒されてもごま塩は立ち上がった。技術では負けている。速度でも負けている。火力でも負けている。それでも、最後まで、一度も自分から勝負を捨てなかった。そして——とうとう一度だけ。

レモンの攻撃をかわした。

「！」

ごま塩の拳が伸びる。もちろん。レモンには届かない。その直前で止められた。でも、ヨルは笑った。

「合格」

ごま塩が振り返る。

「……本当に？」

「うん」



「こんなんでいいゴマ？」

ヨルは首を横に振る。

「こんなんだから、だよ」

最終章「第9席・ごま塩」

その日の夕方。ヨルファミリア本部。ごま塩は正式に席を与えられた。

第9席。

自分の席を前にして、ごま塩はしばらく立ち尽くしていた。
ヨルが隣へ来る。

「どうしたの？」

「いや……」

ごま塩は席を見る。

「本当に僕がここにいていいのかなって思ったゴマ」



「今さら？」

「今さらゴマ」

「私が決めたんだからいいの」

「横暴ゴマ」

「総帥だからね」

「便利な言葉ゴマ……」

ヨルが笑う。少し離れた場所には、まふいとレモンたち。まだ完全に馴染んだわけではない。ここから始まる。ごま塩の新しい日常が。

「よろしくね、ごま塩」

ヨルが手を差し出す。ごま塩はその手を見る。一人で生きてきた。一人で戦って、一人で荷物を背負って、誰かを助けても自分の隣には誰もいなかった。だけど——今日から違う。ごま塩はヨルの手を握った。

「……よろしくお願いしますゴマ」



そして、ちょっと照れ臭そうに笑った。その瞬間、レモンが大量の荷物を持ってくる。

「じゃ、ごま塩」

「ん？」

ドサッ！！目の前に置かれる。

「これ物資保管庫までお願い」

「……………」

ごま塩がヨルを見る。

「……………」

ヨルが目を逸らす。

「……………」

まふいも目を逸らす。

「……………」

レモンは笑っている。



「……………」

ごま塩は天井を見上げた。そして入団後、記念すべき最初の一言。

「本当に荷物持ちじゃねえかゴマアアアアア！！！」

ヨルファミリア第9席。ごま塩。こうして——後に誰よりも皆に振り回され、誰よりもツッコミ、何度吹っ飛ばされても立ち上がり、それでも仲間が危険なら真っ先に駆けつける少年が、ヨルファミリアへ加わった。

彼は最強ではない。ヨルのような圧倒的な力もない。まふいのような怪物じみた力もない。それでも、ヨルがあの日見つけたものは間違っていなかった。

「弱くても、逃げない。」

それが第9席・ごま塩の、誰にも奪えない強さだった。——そして翌朝。

「ごま塩ー！ 荷物お願い！」



「入団二日目から扱い雑すぎるゴマアアア！！」

彼の騒がしいヨルファミリア生活が始まった。

